

の枝をまた口に含み歸るといへり。雁木坂の名は、彼の落し置ける散木の体を以て呼べる成るべし。

○二丸唐門

此の門は、二丸殿閣の玄關前の正面也。改作所舊記に載せたる寛文二年二月の小幡宮内書簡に、金澤二丸唐門出來用に、越中庄川より材木引寄方の儀に付、奉行横山甚左衛門等出發の旨見たり。小幡宮内は城代を勤めける故なるべし。金城深秘録に、二之丸唐御門・同内扉重門・足輕番所とあり。又唐門は唐の門の建て方なり。故に唐門といふともあり。是寛永八年の火災以前本丸にありし唐門の古例に據りて、二丸に同年殿閣の造營を命ぜられし時、本丸の唐門とひとしく建築ありたるなるべし。本丸の唐門の事は既に上文に載せたり。

○裏口門

此の門は二丸廣式向きの裏口にて、切手門の内に入り。故に裏口門と呼べりといへり。金城深秘録に云ふ。裏口御門は能役者出入の門の由、門内に御樂屋あり。是を御樂屋多門といふ。故に右裏口御門をば、俗に猿樂御門と申候。と

いへり。

○切手門

此の門は裏口門の外扉なる縮門にて、廣式向裏口の惣門也。此の門より土橋門へ往來す。切手門の名目追考すべし。

○土橋門

此の門は二丸より北丸甚右衛門坂口へ出づる往來門にて、舊藩中は二丸廣式向の出入門也。金城深秘録に云ふ。土橋御門は御廣式出入の門也。御門下左右掘切にして、土橋に相成り、石川御門外と同様也。故に土橋御門と云ふとぞ。とあり。平次按ずるに、伊勢風土記に、迎相土橋郷岡本村云々。など見たりたる土橋は、ツチハシと讀めれど、此の城内なる土橋門はドバシと呼べり。金澤市中の土橋も皆ドバシと云へり。

○土橋門脇石垣

金城深秘録に云ふ。城中石垣崩所等普請之儀、江戸表に届之起本、寛文二年進達相成る繪圖裏書之寫。

加州金澤城石垣破損之覺

んか。

○大將櫓

此の櫓は松坂門の右の方なる櫓臺なり。従前は櫓ありしかど、寶曆九年の火災後再造なしといへり。金城深秘録に、大將櫓は敵の大將或は人質を入れ置ける二重櫓なり。人の氣付かざる爲め大將櫓と名付けたるものか。此櫓臺に限り石垣なし。大切の囚人を入れ置く櫓なるが故に、石垣なきか。といへり。按ずるに、三州名蹟誌に、二丸大將櫓は、佐久間玄蕃在城の時分時鐘の鐘樓也。と載せたり。今云ふ大將櫓の事なるか。但し其の據を知らず。また佐久間氏の時世に時鐘などあるべきよしなし。恐らくは後人の附會なるべし。

○松坂門

此の門は二丸より玉泉院丸への往來門なり。此の門外より玉泉院丸・紅葉橋までの間は坂路にて、此の坂路をば松坂と呼べり。昔は松生茂り居たりと云ふ。金城深秘録に云ふ。往昔此門邊松原なりしと云ひ傳ふれば、此門創立の頃松坂門と名付けられたるならん。といへり。

一、二之丸土橋門脇右之方石垣惣高貳間、長八間、上石二篇崩申候。寛永八年得<sup>レ</sup>上意、石垣申付候處、小石に而扣短く御座候に付、翌年の春大風に而崩共崩申候。其以後不<sup>レ</sup>申上、其儘に指置申候。

一、同所門脇左横幅六尺、長四間貳尺、高貳間、折廻長貳拾四間、高堀底より七間三尺。右同時得<sup>レ</sup>上意普請仕候處、小石故崩、其儘指置申候。

一、同所土留石垣築さし長三十間、高三間。右同時得<sup>レ</sup>上意石集置候得共、あなたこなた相延、于<sup>レ</sup>今普請不<sup>レ</sup>申付候。

三ヶ所普請之儀に付而、酒井雅樂頭殿・土井大炊頭殿・酒井讚岐守殿・永井信濃守殿一紙奉書、去春松平伊豆守殿迄上申候。

右御届起本如此御座候。

平次按ずるに、右幕府への届書にて見れば、土橋門の地邊なる石垣は、悉皆寛永八年二丸を本城となし殿閣造營の時、伺に相成り修築ありしこと知られけり。さて其の後破損所其の儘なりし事は、下條に引證せる今枝直方筆記に載せたる趣にて勘考すべし。是利常卿の深慮ありての事なら